

# 石川県七尾美術館だより

平成30年1月1日発行  
編集・発行 (公財)七尾美術財団

## 第92号(冬号)



①



②



③



④



⑤



⑥

ISHIKAWA  
NANAO  
ART MUSEUM

平成29年度冬季展覧会

### お茶道具ならんだ ~池田コレクションより~

- ① 「後奈良天皇和歌懐紙」
- ② 「竹茶杓 追銘下ソキ」 古田織部
- ③ 「信楽水指 銘腹鼓」
- ④ 「織部蓮絵茶碗」
- ⑤ 「志野三足付香合」
- ⑥ 「萩手鉢」

※全て当館蔵(池田コレクション)、①は重要美術品

# 展覧会紹介

平成30年1月4日(木)〜

4月22日(日)

※休館日については裏表紙をご覧ください

## 「お茶道具ならんだ」「モノクローム」

12月16日(土)「開催中」〜2月12日(月祝)

※本記事掲載作品画像は全て「池田コレクション」です。

現在当館に所蔵されている作品は約750点。その記念すべき第1号は昭和63年(1988)、後に建築予定であった当館の所蔵品として、七尾市に寄附された「池田コレクション」でした。七尾市出身の実業家・池田文夫氏(1907〜87)が蒐集した美術工芸品125点を皮切りに、作品収集の歩みが始まったのです。

そこから月日は流れて現在。数多くの皆さまのご協力により、たくさん作品を所蔵することができました。それらは、いずれもかけがえのない貴重な作品ばかりです。従って当館では、定期的に所蔵品を公開する機会を設け、そのすばらしさを紹介してきました。

本展もその一環として開催するもので、今回は「茶道具」「モノクロ」の2テーマを設定。あわせて70点の作品を紹介しています。

新しい年を迎え、何かと忙しい毎日。ここで一息ついて、当館にて作品たちと対面しながら、静寂に満ちた冬のひとときをすごされてはいかがでしょうか。



「織部宝珠香合」



「桑名蕪青盆」



「手付花籠 飯塚琅珩斎」



「黒楽茶碗 銘福笑 樂 惺入」

### ◆第1展示室

#### 「お茶道具ならんだ」池田コレクションより

安土桃山時代に千利休(1522〜91)が「茶道」を大成してからはや400年。その間数多くの人びとに愛好され受け継がれてきた茶道は、日本の精神を象徴した、まさにわが国を代表する伝統文化といえるでしょう。

さて、茶道は「茶道具」と総称される様々な道具を使用します。それらは書や絵画などの掛物から香炉や香合・花生、釜や水指・杓や建水、そして茶碗や茶器、さらに菓子器や食器など実に多彩です。内容も、やきものや漆工・金工など広範で、さらに産地や作家・時代や流派・流行やお好みなどで千差万別。現在まで膨大な数の茶道具が制作され、折々に茶席を彩ってきました。

当館所蔵品の中核である「池田コレクション」は、茶道美術コレクションとしての特色を持っており、池田氏が活躍した岐阜県や石川県などにゆかりのやきものをはじめ、数多くの茶道具が含まれています。

本展では同コレクションより、様々な茶道美術品などあわせて44点を展示しています。

### ◆第2展示室

#### 「モノクローム」単色の宇宙

「モノクローム」とは「ひとつの色」のこと。厳密には「背景色ともう1色」なので、「2色を使用したもの」という意味になります。また色の指定はありませんから、実は赤でも青でも前述どおりならば「モノクロ」になるのです。しかし「モノクロ」と聞けば、ほとんどの方は「白黒」をイメージするのではないのでしょうか。

かつて、私たちの生活の中には「モノクロ」があちこちに存在しました。テレビや映画・写真・書籍など、特に年配の方にはなじみが深いのではないのでしょうか。近年その多くがカラー化されましたが、モノクロにはモノクロならではの「味」があります。逆にカラフルが氾濫する当世だからこそ、そのシンプルさに魅かれませんか。

美術工芸のジャンルでも、モノクロは重要な技法のひとつです。例えば水墨画や書・写真などはその代表格といえるでしょう。

そこで本展ではモノクロの中でも「白黒」に焦点をあて、絵画や工芸・書・写真から26点を展示しています。



「勢多迦童子図」佐藤朝山(玄々)



「筏流図」近藤浩一

### ◆共通観覧料

	一般	個人	団体
大高生	350円	280円	220円

※中学生以下無料・団体は20名以上です。

# 「幼きものは」「水温む」

2月24日(土)〜4月22日(日)  
※会期は延長となりました。

## ◆第1展室

### 「幼きものは」

作家は幼いものの存在に何を見だし、作品のモチーフとして制作したのでしょうか。

上野動物園のシャンシャンは可愛らしい姿で高い人気を誇り、その成長が全国ニュースで伝えられるほどです。テレビ番組やインターネットの動画投稿サイトは、人間の子どもに限らず、子犬や子猫を筆頭にたくさん動物の子どもを撮影した映像で溢れています。彼らの予想もしない行動、無防備な様子、愛くるしい姿などを目にするだけで、無条件に心が癒され、温かい気持ちになる方が多いでしょう。

このように、私たちは人間や動物の子どもの大部分を愛らしく、か弱い存在として認識しており、この側面を切り取った作品は数多く制作されてきました。

一方、単に庇護欲をかきたてるだけではなく、幼きのなかに力強い生命力と意志を内包した存在として、永遠の憧れの対象でもありました。



「近代日本色紙画帖(京都編)」より  
上村松園(池田コレクション)



「少女」 齊田正一

作家は「幼きもの」の純粹無垢な姿に憧れ、成長してゆく姿に希望を見だし、制作せずにはいられなかったのではないのでしょうか。

絵画・彫刻・写真の約20点で「幼きもの」に向けられた作家の様々な視点をご覧ください。薄れてしまった幼少期の記憶が呼び起こされることでしょう。

## ◆第2展室

### 「水温む」

寒さ厳しい当地北陸では、春を迎える喜びもひとしおです。

「春が来た 春が来た どこに来た」と童謡にもありますが、皆さんが最初に春を感じるポイントはどこでしょうか(タイヤ交換だったりもします)。

二十四節気では2月頭の「立春」が春の始まりとされています。しかし実際に春を感じるのは、空から降る雪がいよいよ雨にかわる「雨水(うすい)」を過ぎ、春一番が吹き、草木も芽吹き始める頃からではないでしょうか。「啓蟄(けいちつ)」ともなると「蟄虫啓戸(すこもりむしとをひらく)」のとおり、土の中で冬眠していた虫などが、ポカポカとした陽気に誘われ、地上に姿をあらわします。

やがて地面が乾きはじめると、花が咲き、小鳥が飛び交い、いよいよ春本番です。世界は新しい

春を迎える喜びに満ち溢れ、私たちもウキウキと、何かを期待せずにはいられません。

絵画 彫刻・工芸・書のジャンルから約30点を展示し、寒さが緩むことへの、いきものが活動し出すことへの喜びを表現した作品を紹介します。美術館で一足早い春をお楽しみください。



上:「四季耕作図屏風」(右隻)  
狩野岑信



右:「蒔絵瑞蝶文香合」  
高野松山  
(池田コレクション)



左:「巢立蜂」田中太郎  
(池田コレクション)

### ◆共通観覧料

	一般	個人	団体
大高生	350円	280円	220円

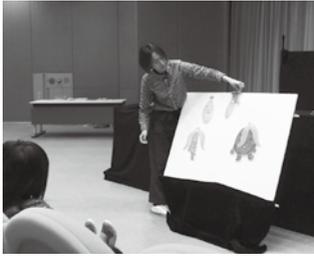
※中学生以下無料・団体は20名以上です。

## ポローニャ国際絵本原画展報告

秋に始まったポローニャ展は冬の到来で会期を終えました。今回も11月2日から12月10日まで39日間にわたる無休での開催でした。

開会式では七尾市立袖ヶ江認定こども園袖ヶ江保育園さくら組の皆さん13名が元気にタンバリンの遊戯を披露してくださいました。絵本の会もこさんの「かんたん絵本を作ろうよ!」、NPO法人ぽっかぽかさんの「おはなし劇場」、野間成之さんの「『のまりん』の紙芝居劇場」と毎週のイベントも盛況でした。

20回目の開催でしたが、初めて来館したという方もいらっしやいました。継続して開催するためにも、ポローニャ展をもっと多くの皆さんに知っていただく努力が必要だと感じた記念の年でした。



おはなし劇場



開会式 袖ヶ江認定こども園袖ヶ江保育園さくら組



「のまりん」の紙芝居劇場



かんたん絵本を作ろうよ!

## ボランティア研修旅行報告



当館の監視をお願いしているボランティアスタッフを対象に毎年研修旅行を実施しています。今回は9月25日(月)に、ボランティアさん18名と職員2名で金沢へ行ってきました。

最初に、石川県文化財保存修復工房へ。中越理事と高嶋次長の案内で工房内を見学しました。根気と時間を要する細かい作業を拝見し、別室にて掛け軸の取り扱いなどを説明いただき、貴重な体験ができました。次に訪れたのは、お隣の石川県立美術館です。「燦めきの日本画」展で、石崎光瑠の作品などを前田学芸員の解説で鑑賞しました。

兼六園内での昼食後、羽咋の妙成寺へ。五重塔をはじめ、文化財の寺院建築などを山川執事長の案内で鑑賞し、最後に茶店でお団子を食べながら楽しく意見交換しました。

お天気にも恵まれ、あつという間に時間も過ぎ、無事研修旅行を終えることができました。ご参加いただいた皆様ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。



掛け軸の取り扱いの様子



石川県立美術館にて集合写真



五重塔をバックに記念撮影

## 友の会美術講座「七尾de再発見・パートIII 悠久の『山の寺』をめぐる」実施報告

平成29年10月21日(土)、七尾「山の寺寺院群」が年1度のイベント「山の寺の日」で盛り上がりつつある中、計7名で本講座は行われました。

当日は折悪しく大型台風が接近中。今回、移動はほぼ徒歩です。時々小雨がぱらつくどす黒い天を見上げ、天候悪化回避を祈りながら出発。

まずは最初の目的地である長壽寺へ。同寺では無分・宗清・等伯という「長谷川三代」の仏画が特別展示されており、それらを観て等伯に想いを馳せつつ、高木ご住職よりお寺の歴史などをお話しいただきました。皆さん等伯はもろろん「八百屋お七」の話題にも興味津々のご様子。

続いて本延寺に移動。お茶会が開催されており、着物姿の方々などで賑わっていました。最初に河崎ご住職よりお寺の歴史などのお話しを聴き、「法華経宝塔曼荼羅図」(京都市・立本寺蔵、複製)の特別展示や「じやり道工房展」を鑑賞。最後に、お抹茶をいただきホッとひと息。

そして今回、ラストを飾るのは宝幢寺です。やはり最初に高田ご住職からお話しを頂戴し、特別展示の「古本尊像」とあわせて展示されている西念寺の寺宝を鑑賞。いずれもなかなか観ることのできない貴重な文化財で、皆さん眼を大きく見開いて観ておられました。

今回は半日コースでしたので、訪ねたのは16箇寺中3箇寺だけでしたが、どのお寺も魅力満載で、参加者からはとても濃密な時間をすごせたとの感想をいただきました。

ご参加の皆さま、そしてご協力くださいましたお寺の皆さま、本当にありがとうございました。



宝幢寺本堂前にて

## 第18回 友の会鑑賞の旅実施報告

今年度の友の会鑑賞の旅は、職員3名が同行し、11月7日(火)京都方面へ20名のご参加を得て実施しました。

最初は三十三間堂へ。一方通行の堂内を進み角を曲ると、ものすごい数の観音像が目にとび込んできて、そのまばゆいばかりの美しさに圧倒されました。

次は養源院へ。ご住職のお話しを聞きながら、本堂の依屋宗達筆の杉戸絵「白象図」「唐獅子図」「波に麒麟図」と、金碧の襖絵「松図」を鑑賞。大胆な構図とモダンなタッチを間近で堪能することができました。また、廊下の天井は「天天井」と呼ばれており、戦いで自害した武士たちの手や足などの血痕がはつきりと見えて、衝撃を受けました。午前中は少し慌ただしくなりましたが、無事昼食会場へ移動。

お昼をはさんで、午後はいよいよ京都国立博物館「国宝」展へ。40分程の入場待ちを経て展示室へ入りました。室内は大変混雑していましたが、等伯筆の水墨画「松林図屏風」は静寂な空気につつまれているようであり、一方久蔵筆の金碧画「桜図」は胡粉で盛り上げられた桜の花や、今なお光を放っている金箔がとても美しく、沢山の人がそのすばらしさに見惚れていました。

こうして貴重な文化財を巡り、無事に鑑賞の旅を終えられたのも皆様のおかげです。本当にありがとうございました。



京都国立博物館前にて

## 貸館催し物案内

アートホール

### 映画「憲法を武器として」上映会

1月21日(日) 開演 午後2時

これは、昭和37年12月、北海道恵庭(えにわ)町で起こった事件と、その後3年半に及んだ裁判の軌跡。2人の被告を支えた憲法第12条「不断の努力」。又、50年後明らかになった真実とは…。

入場料 1,000円 ※中高生以下無料

主催 映画「憲法を武器として」を七尾で見る市民の会

連絡先 草野真理子

☎0767(58)3155

### 第20回石島音楽教室

ピアノ・エレクトーン発表会

3月4日(日) 開演 午後1時30分

第20回目となる今回の発表会は、個性を生かしたソロ演奏の他に、他楽器とのアンサンブルにも挑戦します。どなたでもお気軽に、御来場ください。

主催 石島音楽教室

連絡先 石島 ☎090-2090-1861

### おたのしみ発表会

3月10日(土) 開演 午前9時15分

学校から帰ってきて過ぎて過すわずかな時間の中で、友達と協力し、励まし合いながら発表に向けて練習してきた成果をたくさんの方に見ていただきたいと思しますので、ぜひお越しください。

主催 小丸山放課後児童クラブ

連絡先 同右 ☎0767(52)3710

## 等伯コーナー

「長谷川等伯展」記念講演会報告  
「等伯と、法華宗をめぐる人々」

講師 栗原啓允氏(高岡市大法寺ご住職)



### 《当時の法華宗寺院と信徒》

等伯が七尾で活動し始める頃、京都では法華宗の十六の本山が、全国各地に末寺を展開して隆盛を極めていました。この本山と末寺の関係は「本末関係」と呼ばれます。当時の末寺の住職・信徒達は皆本山に付属する支院、いわゆる宿坊を通して強く本山と結ばれていました。例えば地方の末寺の住職、信徒が上京した時には必ず特定の宿坊を宿所としていたのです。

では、当時これら京都の法華宗の本山を支えていた信者達には、どんな人がいたかと言いますと、皆様のよくご存じの人物を挙げてみますと、妙顕寺には呉服屋を家業とし、尾形光琳、乾山を出した一門である雁金屋尾形一門。本圀寺では江戸、京都の銀座を支配した大黒常是一門。本法寺には、刀剣を家業とし本阿弥光悦を輩出した本阿弥一門、蒔絵御用の名門五十嵐一門もまた本法寺の信徒です。そして妙覚寺には、大判座、分銅座を支配した彫金の後藤一門。絵画御用の狩野一門、陶芸の楽一門も妙覚寺の信徒です。依屋宗達を出した唐織屋依屋一門、連歌界の指導者、里村紹巴は頂妙寺の信徒です。立本寺には紺灰座を支配した灰屋佐野一門、本能寺には茶屋一門でこれは、呉服御用、後には海外貿易を司ります。こういう芸術家やその他多くの豪商達が、熱心な法華信徒として夫々が所属する本山を支えていたわけです。そしてこれら当時の法華宗信徒達にとって、

夫婦が共に法華衆であることは当然のこととされ、一家一門、時には使用人である職人までも法華であるべしという掟を厳格に守っていたわけだ。現在残されているこれら法華衆一門の家系図を見ると、例えば後藤一門は狩野一門と本阿弥一門と、重層的な血縁関係を結んでいます。加えて彼らは互いの家職もまたコラボレートさせていました。例えば刀剣では、塗りは五十嵐、目利き、拭い、研ぎは本阿弥、鏝などの刀装具の意匠は狩野、依屋などが行い、実際の彫金作業は後藤、埋忠等がやるのです。要するに、法華衆が互いの家職を分業しながら製品を仕上げていくという構造なわけです。

要するに、信仰と血縁関係と家職を重ね、それを共有しながら、絢爛たるコミュニティを形成していたのです。この当時の法華宗の布教方法は独特なものです。有力な法華商人たちが全国に展開する商品流通ルートに沿って、法華宗の布教は進められていくわけです。七尾は日本海交易の要です。さて、等伯の実家の奥村家は本延寺の信徒で、宿坊の教行院を通して京都本山本法寺に繋がっていました。等伯が当時の法華衆の掟に従って同じ七尾法華衆である長谷川家に養子に入った場合、長谷川家は長壽寺が菩提寺、本山は京都立本寺で当然所属の宿坊も変わることになります。しかし等伯の場合少し違うのです。長谷川家へ養子に入ったその後も、ずっと本法寺との関係を続けていくのです。

制作が、あろうことか七尾にいた等伯に対して依頼されたのです。京都には狩野一門がいるわけですよ。

たと考えています。多分等伯は二十歳前後の頃に教行院で絵の修業をする傍ら、当時の住職である日受に帰依して「師檀関係」を結び帰郷した。日受との「師檀関係」を残したまま長谷川家へ養子に入ったので、長谷川の名前で自身の実家である奥村家の所属する本延寺に祖師像の彩色の寄進が可能であったのでしよう。等伯は京都での修行時代から日堯の面貌もよく知っていたでしょうし、何よりも日受を背景に持っている。つまりこの二つの要素がないと、この絵の制作依頼が等伯になされることはないのです。ある意味日受の独断に近い形で、自身と「師檀関係」にあった等伯に制作が依頼されたのであろうと考えています。

この絵は日堯三十歳の遺像です。その

その二代目住職が日受です。要するに当時の本法寺の大番頭として、本法寺の運営に関して大きな権限を持っていた人物であった訳です。加えて、この日受という僧侶は法華衆の名門、蒔絵を名譽の家職として後藤一門、本阿弥一門等とも家職、血縁を重ねていた五十嵐一門の出身なのです。教行院の住職は、第二世日受から第六世の日富までほとんどが五十嵐一門の出身です。つまり本山本法寺における最有力者であり、五十嵐一門の人脈を併せ持った日受の力を、等伯は背景に持っていた可能性があるので、等伯の時代、今日で言う檀家という概念はありません。安土桃山期以前は、あくまでも信徒個人が個人の僧侶を選択し結縁をするいわゆる「対一の師檀関係」が基本です。それが江戸期になつて、お寺に信徒の別、つまり戸籍を持たせることによって、初めて家が一つの単位としてお寺と縁を結ぶ「寺檀関係」に移行します。つまり等伯の生きた時代には自身の意志で個人として、僧侶に帰依し結縁するというのが、許されていたということなのです。

私には等伯と教行院日受とは「師檀関係」で結ばれていたと考えています。等伯の養父母は元龜二年に亡くなる。養父母を送った後に京都へ移住したと考えた場合、どう見ても京都移住は元龜三年か四年くらいですよ。日堯が遷化するのには元龜三年で移住後に縁を結んだのでは、この絵の依頼は等伯には来ない。ですから等伯は奥村信春と名乗っていた時代には既に日受との間に「師檀関係」を結んでいたと考えられるのです。奥村家の菩提寺、本延寺の宿坊である教行院に滞在して絵の修行をする機会があっ

たことさ、この絵が画料を目的として描かれた絵ではなく、あくまでも等伯が自分の養父の追善のために描いて納められている証拠なのです。普通画料を頂く絵に絵師自身の親の法名を書くことはしませんよ。つまり等伯は、能登でこれを描いて本延寺の正覚院日慈に持っていった。日慈はこれに等伯の養父宗清の法号と没年を書き込んで、等伯に印鑑を捺させ、これを教行院に寄せ、これに教行院日受が脇書をして本法寺に寄進し

### 《本法寺の「日堯上人像」と、強力な後ろ盾：本法寺塔頭教行院》

この絵は日堯三十歳の遺像です。その

本法寺開創当時三十四カ坊在ったと伝えられる支院・宿坊の筆頭が教行院で

その二つ要素がないと、この絵の制作依頼が等伯になされることはないのです。ある意味日受の独断に近い形で、自身と「師檀関係」にあった等伯に制作が依頼されたのであろうと考えています。

この絵は日堯三十歳の遺像です。その

たと考えました。

### 《本法寺史料：法華宗の人脈》

京都へ移住した等伯が、どういう環境で絵を描いたかがよく分かる史料に、『妙法堂過去帳』があります。これは日通の出身母体である油屋伊達一門と、本法寺の大壇那であった本阿弥、五十嵐一門とその縁者の供養銘のみを記したいわば日通の個人的な史料です。まず油屋一門は、堺を代表する豪商で、油屋常言が当時の油屋の宗家の当主です。その次男が仏心院日洗で日通の師匠になります。そして、日通の父・常金、常佐、常連、常琢、彼らも油屋の一門で何れも當時有名な茶人です。北向道陳は堺の法華衆で、千利休に書院の茶を伝授した方です。要するにお金持ちで、お茶に精通していて、教養もあって、というのが日通の出身母体、堺の法華衆の実際なのでね。

加えて本阿弥一門は京都本法寺の筆頭の信徒ですから、一門三十七名もの法号が書いてあります。本阿弥一門以外にも、当時の連歌界の指導者であるの里村紹巴などの名前も見えます。彼もまた頂妙寺本立院を宿坊とした法華衆です。それから、等伯日妙、道淳・長谷川久蔵などの長谷川一門の法号もちゃんと書き込まれていて当時の法華衆のネットワークの一端が窺える貴重な資料です。

### 《俵屋一門と狩野一門》

重要な名前が次です。常知日清(蓮池)。それから周政(蓮池)。それから宗利(喜多川常通父)。彼らは同じ一門で頂妙寺の大乗院を宿坊とした法華衆です。そしてこの一門の屋号は俵屋なのです。俵

屋は元来大舎人座三十一家と言われた機織屋です。いわゆる三十一家で織物の生産・流通を独占的に支配していたのです。加えて「蓮池平左衛門尉/加判秀明、狩野大炊助/元信」のように書かれている文書が存在します。これは、扇座、つまり扇絵を描く座の支配の権利を、一門以外に任せないという文獻の一部です。要するに、狩野一門と俵屋一門で、扇座の全権を掌握しているわけです。その理由としては当時の機織座を支配していた一門は、常に織物の下絵つまり正絵を描く図案家としての絵師を確保しておく必要があったことが考えられます。扇座を支配することによって織師と同時に俵屋と狩野一門の絵師達を囲い込んでいたと考えられるのです。そして、

俵屋・喜多川と、俵屋・蓮池、この二家で、機織屋と絵屋、扇屋を分掌する。俵屋の扇は有名でこの頃からブランドです。その絵屋工房・扇屋を掌握したのが、蓮池・喜多川一門の俵屋宗達でしょう、多分。等伯は、京都のどこで絵の修行をし、一門を養っていたのかと考えた時、等伯が背景とした五十嵐一門は、当時狩野一門の工房、俵屋一門の工房、本阿弥一門の工房に隣接した場所に工房を構えているわけですよ。等伯も法華衆の工房が蝟集し、多数の織師や絵師達が居住した地域、上京の中小川地区あたりに住んでいた可能性が高いのです。本法寺も小川通りに面してありますものね。つまり等伯は京都移住の後も五十嵐一門の法華衆のネットワークを背景として、一門を養い自身絵師として成長する環境に困難はなかったはずですよ。極端なことをいうと、等伯は俵屋や狩野一門の工房で絵を描いていたことさえあるかもしれない

い。つまり、後年光派・琳派と称されるようになる俵屋宗達も、あの有名な本阿弥光悦さえ当時の等伯のごく近傍にいるのです。そして、俵屋を含めて当時の上層の法華衆は極めて富裕、茶の湯に精通し多くの名器名物も所有している。そういう交わりの中で、等伯は多くの名画に触れるんですね。例えば等伯画説にも等伯が里村紹巴の家で、応召君の名画を現に見ましたと書いてありますね。堺衆の記述も多くあります。日通の親族も皆堺の有力な法華衆ですから、そこに所蔵されていた宋元時代の名画を鑑賞する機会が充分あったのでしょね。

### 《等伯と千利休》

では、千利休と等伯はどうやって結びついたのでしょうか。その理由を考えるに、これまで私が述べてまいりましたように、当時の長谷川等伯が活動の背景とした堺、京都の法華衆の多くは極めて富裕であり、また茶の湯、連歌、能楽等に通じた教養人でありました。皆様よくご存じの通り千利休は茶の湯の大成者であると位置づけられています。利休自身は禅の帰依者ではありませんが、法華衆と茶の湯の深い関わりを考えた時、利休と法華衆の間に茶の湯を通しての深い交流の存在を予想することは容易なことでしょう。加えて利休の出身母体もまた日通と同じ堺、魚屋。日通の出身母体である油屋は当時から一門を挙げて茶の湯に精通し加えて多くの名器名物を所蔵したことで知られていました。また当時の法華衆が其々の家職を通して時の政権と深い関わりを有していたことも見逃すことの出来ない要素であると思われれます。刀剣の御用、金銀貨幣の制

作、海外貿易等に象徴されるように、彼らの所謂政商としての側面は確実に存在するのですから。これらの事柄を考慮合わせた時、天下人豊臣秀吉の側近にあつた利休と等伯は法華衆のネットワークを介して意外に近い場所にいたことがわかります。利休施主の大徳寺金毛閣の天井、柱絵の制作依頼が、等伯になされた理由もまた法華衆、堺、茶の湯をキーワードとした其々の関係性の中に存するのかも知れません。

### 《結びに》

等伯は、能登において法華衆のネットワークの中で主に法華宗の寺院に、僧侶のために絵を描いた。そして、京都に移住した後には教行院日受に連なる五十嵐、本阿弥一門の後援を受けて、その血縁、家職のネットワークの中で、自身画業を続け一門を育てていく。やがて、日通との結縁を経て千利休とも繋がる。利休と繋がった等伯は、この頃から法華衆のネットワークの外で、大きな仕事を受注しながら、画家として大成を行つたのだと思います。私自身は法華宗の僧侶でありましたので、絵を見る学者さんたちとは少し違った等伯の姿が見えます。等伯の絵師としての生涯そしてその画業を考察する時、当時の法華衆の有り様というのを明らかにすることが、等伯の制作の背景を際立たせることに資するのではないかと考え、この度七尾美術館の依頼を受け、「法華宗をめぐる人々」というかたちでお話をさせていただきました。

※本文は平成29年4月29日に行われた「長谷川等伯展」記念講演会の内容を、当館の責任においてまとめたものです。



# これからの展覧会予定



平成30年4月28日(土)～5月27日(日) 〈会期中無休〉

## ◆第1・2・3展示室

### 「長谷川等伯展 ～等伯の挑戦と継承せし者たち～」

当館で毎年開催している、能登国七尾出身の絵師・長谷川等伯(1539～1610)のシリーズ23回目の展示です。今回は、平成29年度「長谷川等伯展」で新たに紹介した等伯の重要な人脈にも触れながら、《等伯の挑戦…信春時代の仏画と鑑賞画》《等伯の挑戦…巧みな水墨画の技へ》《等伯を継承せし者たち》の3テーマで、「複製松林図屏風」を含めた27点を展示します。等伯の絵師としての挑戦、活躍を是非ご覧ください。

☆特別講演会：4月29日(日、祝) 午後2時～

国指定重要文化財  
「禪宗祖師図襖」(部分)  
長谷川等伯  
京都市・天授庵蔵



「羅漢図」長谷川等伯  
京都市・大徳寺蔵



## 平成30年度 石川県七尾美術館友の会会員募集のご案内

新年度友の会会員を次の要領で募集いたします。現在会員の方で更新をご希望される方は改めてお申込みください。お申込みのない場合はそのまま退会となってしまいますのでご注意ください。

- ★入会手続き★ ①受付開始 3月1日(木)から【年度会費1,000円】※1
- ②受付場所 当館受付カウンターまたは郵便受付※2  
(郵便振替用紙をご利用ください)

※1 会員証は美術館だより第93号(春号・2018年4月1日発行予定)と一緒に送ります。  
 ※2 郵便局備え付けの振替用紙の通信欄に必要事項(会員の区別(更新・新規・元会員)・郵便番号・住所・電話番号・氏名)をご記入のうえ、会費を添えて最寄りの郵便局窓口へお出しください。払込手数料(130円)は恐縮ですがご負担ください。

郵便振替口座番号 00710-0-50795  
 加入者名 石川県七尾美術館 友の会

### ★友の会特典★

- その1 当館主催展覧会の観覧料が割引になります。
- その2 情報満載「美術館だより」をお送りします。(年度内4回発行)
- その3 相互割引提携館主催の展覧会観覧料が割引になります。(会員本人のみ)
- その4 特別企画展開会式・内覧会にご招待します。(無料)
- その5 販売グッズが割引になります。(一部除く)
- その6 喫茶室利用代金が10%割引になります。(10円未満切捨)



「松竹図屏風」(部分)  
長谷川等伯

※左記のほかにも友の会会員限定の催し、特典がございます。4月からご活用いただけるよう、お早目のご入会をお待ちいたしております。

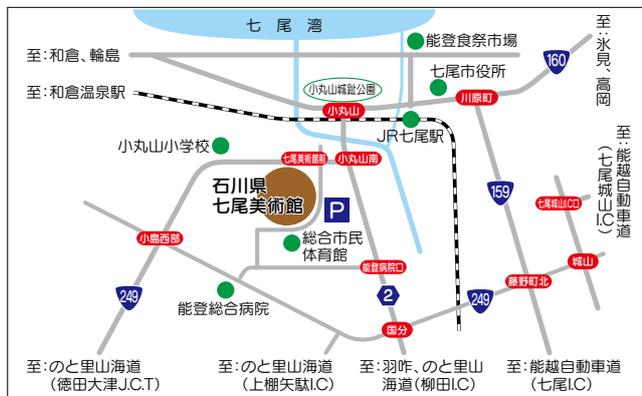


割引、プレゼントなど特典いろいろ！ぜひご利用ください。

無線でネット



エントランスホール及びティールームにて、Wi-Fiスポットサービスの「FREESPOT」をご利用頂けます。



- 飛行機…のと里山空港から「のと里山海道」利用約45分 ●車…「のと里山海道」徳田大津JCTから約15分又は「能越自動車道」七尾城山IC又は七尾ICから約10分 ●タクシー…JR七尾駅から約5分
- 徒歩…JR七尾駅から約20分 ●市内循環バス「まりん号」…JR七尾駅前「ミナクル」バス停から「七尾美術館前」下車(順回り約8分・逆回り約14分、1日各8便) ●ななこコミュニティバス「ぐるっと7」…JR七尾駅前5番乗り場から「小丸山台1丁目」下車(西コース約10分、1日4便)

◎次号・第93号(春号)は4月1日発行予定です。

日	月	火	水	木	金	土	2018
1	2	3	4	5	6		1
7	8	9	10	11	12	13	January
14	15	16	17	18	19	20	
21	22	23	24	25	26	27	
28	29	30	31				
日	月	火	水	木	金	土	2018
				1	2	3	2
4	5	6	7	8	9	10	February
11	12	13	14	15	16	17	
18	19	20	21	22	23	24	
25	26	27	28				
日	月	火	水	木	金	土	2018
				1	2	3	3
4	5	6	7	8	9	10	March
11	12	13	14	15	16	17	
18	19	20	21	22	23	24	
25	26	27	28	29	30	31	

◆ 1月～3月カレンダー ◆ ※ は休館日  
 ◆ 開館時間 ◆ 午前9時～午後5時  
 (入館は午後4時30分まで)